



京都市教育委員会後援

きょうと かんじ たんけんたい 京都漢字探検隊

だい かい しよくぶつえん かんじ であ
第4回 植物園で漢字と出合おう

10月6日(土) 京都府立植物園において白川静記念東洋文字文化研究所(白川研)主催の「京都漢字探検隊 植物園で漢字と出合おう」が行われ、小中学生と保護者ら約60名が参加しました。

これは白川研が、漢字は「体系を持っている」「その構造を理解することによって、記憶も容易となり、適確に使用することもできる」という故・白川静立命館大学名誉教授の提唱を一般に広める目的で企画したものです。座学ではなく、自分で体験したり、実物を見学したりすることにより、漢字の成り立ちや構造、名前の由来などを学び、また漢字を発明した古代人の高度な思考を理解させることも目的としています。

今回の講座では、あらかじめ甲骨文字から現代の楷書に至るまでの字体で書かれた植物の名前や植物からできた漢字(生・世・葉・秀など)の一覧表が配られました。まず白川研職員から双葉が出たさまを表した「生」から、稲の実が落ちたさまの「禿」まで、植物の形体の変遷からできた漢字を説明しました。その後、植物園の松谷茂園長の案内で園内を巡りながら、「楠(クスノキ)の葉や枝のにおいは、昔たんすに入れていた防虫剤・樟脳(しょうのう)の香り」「アジサイを『紫陽花』と書くのは、本当はまちがい」「杜仲(トチュウ)には天然ゴムの成分も含まれている」「『栗』は実をつけたクリの木のだま」など、漢字・植物・環境の3つの領域にわたる説明を受けました。園内一周の後にはまた教室に戻って「草原に月が沈み、太陽が出ているさまを表した漢字は」など、漢字の謎を探索しました。

文字の記された甲骨のレプリカや白川静関連書籍・カレンダーを置いたコーナーには、講座終了後もたくさんの参加者が足をとめ、熱心に見入っていました。

第5回目の講座は12月16日(日)に「匠もびっくり、漢字の技」と題して、京都産業ふれあい館(京都市左京区・みやこめっせ内)で行われます。また当日は「大人の漢字探検隊第2回・伝統産業に学ぶ漢字の智慧」も併せて行います。白川研では、今後も自然や伝統産業などをテーマとした体験型の講座を企画しており、白川文字学の一層の普及と、理解をさせる漢字教育の構築を目指しています。

「植物園で漢字と出合おう」(10/6) から



楠(クスノキ)の葉をこすって、
においをかいでごらん。



コスモスは「秋桜」と書きます。



杜仲(トチュウ)の葉を引っ張ると、
ねばねばしたものが出てくる。



金明孟宗(キンメイモウソウ)は、
「かぐや姫」の光る竹のモデルです。



「中」は草が一本生えた様子。
草が二本生えた「艸」は、「くさかん
むり」に。三本生えた「卉」は、
「花卉(かき)」という言葉で使われる。



亀の甲羅に何か書いてあるよ。